

七

おれは即夜そくや下宿を引きはら払った。宿へ帰って荷物をまとめていると、女房にようぼうが何か不都合ふつごうでもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云いっておくれたら改めますと云う。どうも驚おどろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃そろつてるんだらう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分わかりやしない。まるで気狂きちがいだ。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたって江戸えどっ

子の名折れだから、車屋をつれて来てさっさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまって尾ついて来い、今にわかる、と云って、すたすたやって来た。面倒めんどうだから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意かなに叶かなったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静かんせいで住みよさそう

な所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまつた。ここは士族屋敷やしきで下宿屋などのある町ではないから、もつと賑にぎやかな方へ引き返そうかとも思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控ひかえているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違そういない。あの人を尋たずねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。幸さいわい 一度挨拶あいさつに来て勝手は知ってるから、捜さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけ

て、ご免めんご免と二返ばかり云うと、奥おくから五十ぐらいな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て来た。おれは若い女きらも嫌きらいではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持こころちがする。大方きよ清がすきだから、その魂たましいが方々のお婆ばあさんさんに乗り移るんだらう。これは大方うらなり君のおつ母かさんさんだらう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりあがりと云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお

困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦くぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いてみましょうと、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違ちがいに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした

事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがいに乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けなない気で、世間並せけんなみにしなくちや、遣やりきれない訳きんちやくきりになる。巾着切きんちやくきりの上前をはねなければ三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊くつちや先祖へ濟まないう上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、

六百円を資本もとでにして牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍そばを離はなれずに済くむし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮くらされる。いつしよに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎いなかへ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな気立きだてのいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来
ませんかと時々尋ねてみるが、聞きたんびに何にも参
りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか
銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さ
んが夜よるになると、変な声を出して謡うたいをうたうには閉
口するが、いか銀のようにお茶を入れましようむやみと無暗
に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ
来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れな
さつて、いつしよにお出いでなんだのぞなもしなどと質
問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想かわいそう

にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰だれさんは二十でお嫁よめをお貰もらいたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人ふたりお持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんぱくを試みたには恐れ入った。それじゃ僕ぼくも二十四でお嫁をお貰もらいるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似まねて頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当ほんまの本当のつて僕あ、嫁が貰もらいたくつて仕方がな

いんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入って返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちやんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お気をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を気を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等らにも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢じょうさんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬢べっぴんさんじゃがなもし。あまり別嬢さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思った」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人とうじんの言葉で、別嬪べっぴんさんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生よしかわがお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔むかしから碌ろくなもの

居ませんからね。そうかも知れませんか」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神きじんのお松まつじゃの、姉妃だつきのお百ひゃくじゃのてて怖い女こわが居おりましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話よめをしておくれた古賀先生やくそくなもし——
あの方の所へお嫁よめに行く約束やくそくが出来ていたのじゃな
もし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君みが、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかった。人は見懸みかけによ

らない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、
——それまではお金もあるし、銀行の株も持ってお出いで
るし、万事都合つごうがよかったのじゃが——それからとい
うものは、どういふものか急に暮し向きが思わしくな
くなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過よすぎる
けれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお
興入こしいれも延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、
是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」
「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャ

ツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」
「人を頼んで懸合かけおつておみると、遠山さんでも古賀さんにに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——
まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃが
なもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さんの方へ出入でいりをおしるようになった、とうとうあなた、
お嬢さんを手馴てなづ付けておしまいたのじゃがなもし。赤
シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さん
じゃやてて、みんなが悪わるく云いますのよ。いったん
古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら

学士さんがお出た^{いで}けれ、その方に替^かえよてて、それじゃ今日^{こんにちさま}様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行^いったって済みっこありませんね」
「それで古賀さんにお気の毒^{ほった}じゃてて、お友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰^{もら}うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云

いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもとどたそうなの。
赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合おりあいがわるいとい
う評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そん
なくわ詳しい事が分るんですか。感心しちまった」

「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子ようすじやおれの
天麩羅てんぷらや団子だんごの事も知ってるかも知れない。厄介やっかいな所
だ。しかしお蔭かげ様でマドンナの意味もわかるし、山嵐
と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。た

だ困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれのよ
うな単純なものには白とか黒とか片づけてもらわな
いと、どつちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どつちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりゃ強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、
しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある
方かたぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方
が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええという

ぞなもし」

「つまりどつちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪えらいのじやろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やっと参りました。と一本の手紙を持って来てゆっくりご覧と云つて出て行った。取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚まいついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻まわつて来たのである。

その上山城屋では一週間ばかり逗留とまりゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思ったが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思ったが、せつかくあげるのに自分でかかなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、

それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認しためてある。なるほど読みにくい。字がまたいずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読くとうをつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦せつ勝かちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目まじめになつ

て、始はじめから終しまいまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽えん鼻ばなへ出て腰こしをかけながら鄭寧ていねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた歸りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向むかうの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構むかつていられない。坊っちゃん

んは竹を割ったような気性だが、ただ肝癩かんしゃくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名あだななんか、つけるのは人に恨うらまれるもとになるから、やたらに使っちゃんいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭あわないようにしろ。——氣候だって東京より不順に極ってるから、寝冷ねびえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶

代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行って頼りたよになるはお金ばかりだから、なるべくけんやく儉約して、万一の時に差支さしつかえないようにしなくっちゃいけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、為替かわせで十円あげる。——先せんだって坊っちゃんからもらった五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰って、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込こ

んでいると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが
晩めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。
えっぽど長いお手紙じやなもし、と云ったから、ええ
大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見
んだと、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。
見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮つけだ。ここのうちは、いか
銀よりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事
に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日おとといも芋で今夜も芋
だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、
こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。

うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になっちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪まぐろのさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏びんぼう士族のけちん坊ぼうと来ちゃ仕方がない。どう考えても清といっしよでなくっちあ駄目だめだ。もしあの学校に長くでも居る模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食くっちゃならない、団子を食くっちゃならない、それで下宿に居て芋ばかり食くって黄色くなっているなんて、教育者はつらいものだ。禅宗ぜんしゅう坊主ぼうしゅだつて、これよりは口くちに栄耀えいようをさせているだろう。

——おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗ひきだしから生卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割つて、ようやくしの凌いだ。生卵でも營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなつた。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗つて出懸でかけようと、例の赤手拭あかてぬぐいをぶら下げて停車場ていしやばまで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島しきしまを吹かしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君がやつて

来た。おれはさっきの話聞いてから、うらなり君が
なさらぬ気の毒になった。平常ふだんから天地の間に居候いそうろうを
しているように、小さく構えているのがいかにも憐れあわ
に見えたが、今夜は憐れどころの騒さわぎではない。出来
るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日あしたから
結婚けっこんさして、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやってや
りたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こつ
ちへお懸おそけなさいと威勢いせいよく席ゆずを譲ると、うらなり君
は恐れ入った体裁で、いえ構かもうておくれなさるな、と
遠慮えんりよだか何だかやっぱり立ってる。少し待たなくつ

ちや出ません、草臥くたびれますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかつたくらいに気の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致いたしましよとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本にっぽんが困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれ

になるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々それ相応に威張ってるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人おとなしくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぼど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄ったって、これほど立派な旦那だんなさま様が出来るもんか。

「あなたはどっか悪いんじゃないやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持

病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですな」
「あなたは太分じょうぶご丈夫じょうぶのようですな」

「ええ瘠やせても病気はしません。病気なんてものあ大嫌きらいですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑つた。

ところへ入口で若々しい女の笑声きこが聞えたから、何心なく振り返ふつてみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんと

が並ならんで切符きっぷを売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶すいしやうの珠たまを香水かうすいで暖あつためて、掌てのひらへ握にぎつてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端とたんに、うらなり君の事は全然すつかり忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然とつぜんおれの隣となりから、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思つた。二人は切符所の前で軽く挨拶している。

遠いから何を云ってるのか分らない。

駐車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思っていると、また一人あわてて場内へ馳^かけ込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬^{ちりめん}の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖^{きんぐさ}りをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物^{にせもの}である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知ってる。赤シャツは馳^かけ込んだなり、何かきよろきよろしていたが、

切符売下所うりさげじよの前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをして、何か二こと、三こと、云ったと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍そばへ腰おろを卸した。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顛あこをのせて、正面なまばかり眺めてゐる。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違

ない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴って、車がつく。待ち合せた連中はそろそろ吾れわ勝がちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗ったって威張れるどころではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符を握にぎってるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たった二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が

上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇ちゆうちよの体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆっぼへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だ

が、平常ふだんは随分ずいぶん弁べんずる方だから、いろいろ湯壺ゆかのなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れんれぼくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめてやるのは、江戸えどっ子の義務ぎむだと思ってる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合ぐあいにこつちの調子に乗のってくれない。何を云いつても、えとかい、えとかきりで、しかもそのえとい、えが大分めんどう面倒めんどうらしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免蒙めんこうむった。湯の中では赤シャツに逢あわなかつた。もつとも風呂ふろの数かずはたくさんあるのだから、同じ汽車きしやで着きいても、

同じ湯壺で逢うとは極まっていな。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳やなぎが植うつて、柳の枝えだが丸まるい影を往来の中へ落おれしとている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼ぎろうである。山門のなかに遊廓ゆうかくがあるな。んで、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小さな格子窓こうしまどの平屋はおれが団子を食つて、しくじつた

所だ。まるぢようちん丸提灯に汁粉しるこ、お雑煮ぞうじとかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁いいなすけが他人に心を移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚かおろ、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたって、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れみずぶくれのような古賀さ

んが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だ
と思つた山嵐は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動
したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼せまるし。厭味いやみ
で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに
余所よそながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを
胡魔化ごまかしたり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が
破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。い
か銀が難癖なんくせをつけて、おれを追い出すかと思うと、す
ぐ野だ公が入いれ替かわつたり——どう考えてもあてになら
ない。こんな事を清にかいてやったら定めて驚く事だ

ろう。箱根はこねの向うだから化物ばけものが寄り合ってるんだと云うかも知れない。

おれは、性来しょうらい構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶつそうに思い出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よかろう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡わたって野芹川のぜりがわの堤どてへ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、

ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村にはあいおいむら観音様がある。

温泉ゆの町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓たいこが鳴るのは遊廓あそびがらに相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようによたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影ひとかげが見え出した。月に透すかしてみると影は二つある。温泉ゆへ来て村へ帰る若い衆しゅかも知れない。それにしても唄うたもうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらゐの距離きよりに逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後うしろからさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思った。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追っ懸かけた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらゐだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もな

く後ろから追いついて、男の袖を擦り抜けざま、一二足前へ出した踵くびすをぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈がりの頭から顎の辺りまで、会釈えしやくもなく照てらす。男はあつと小声に云ったが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは凶太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そくなつたのかしら。ところが狭くて困ってるのは、おればかりではなかった。

八

赤シャツに勧められて釣つりに行つた帰りから、山嵐やまあらしを疑ぐり出した。無い事を種たねに下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒ふらちな奴やつだと思つた。ところが会議の席では案そういに相違そういして滔々たうたうと生徒げんぼつろん嚴罰論げんぼつろんを述べたから、おや変だひねと首を振ひねつた。萩野はぎのの婆ばあさんから、山嵐やまあらしが、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍うつた。この様子ではわる者

は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲ってるんで、
好加減いいかげんな邪推じやすいを突まことしやかに、しかも遠廻とおまわしに、おれの
頭の中へ浸しみ込まこましたのではあるまいかと迷ってる矢
先へ、野芹川のぜりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんか
している姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと
極めてしまった。曲者だか何だかよくは分わからないが、
ともかくも善いい男じゃない。表と裏とは違ちがった男だ。
人間は竹のように真直まっすぐでなくつつちや頼たのもしくくない。真
直なものは喧嘩けんかをしても心持ちがいい。赤シャツのよ
うなやさしいのと、親切なのと、高尚こうしようなのと、琥珀こはくのパ

イブとを自慢じまんそうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩えこういんも出来ないと思つた。喧嘩すもうをしても、回向院えこういんの相撲すもうのような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなると一銭五厘でいりの出入ひかえじよで控所全体おどを驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議かなつぼまなこの時に金壺眼かねつぼまなこをぐりつかせて、おれを睨にらめた時は憎にくい奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シヤツのねちねちした猫撫声ねこなでこえよりはました。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事やろうもしないで、

まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになって乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の障壁しょうへきになつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑がんとして黙だまつてゐる。おれと山嵐には一銭五厘が崇たつた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易^かえて、赤シャツとおれは依然^{いぜん}として在来の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢^あつた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍^{そば}へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいっしよに露西亞^{ロシア}文学を釣^つりに行こうじゃないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎^{にく}らしかったから、昨夜^{ゆうべ}は二返逢^あいましたねと云^いつたら、ええ停車場^{ていしやば}で——君はいつでもあの時分出^で掛^かけるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸^かりましたねと喰^くらわしてやったら、

いいえ僕はあつちへは行かない、湯にはいって、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠さなくてもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツ

は一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔むかしに引き
払はらって立派げんかんな玄関を構えている。家賃は九円五拾錢じっせんだ
そうだ。田舎いなかへ来て九円五拾錢払えばこんな家へはい
れるなら、おれも一つ奮発ふんぱつして、東京から清を呼び寄
せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと
云つたら、赤シャツの弟が取次とりつぎに出て来た。この弟は
学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわる
い子だ。その癖くせ渡りものだから、生れ付いての田舎者
よりも人が悪わるい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥

珀のパイプで、きな臭い烟草くさくさ たばこをふかしながら、こんな事を云った。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績せいせきがよくあがって、校長も大いにいい人を得たと喜んでいたので——どうか学校でも信頼しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強って今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゅうぶんです。ただ先だってお話した事です、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑けんおんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精しゅっせいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが

——その俸給から少しは融通ゆうづうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと
思うんですがね」

「ありがとどうも難有う。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支えつかないでしょう。
実は古賀君です」

「古賀さんは、だってここの人じゃありませんか」

「ここじの地の人ですが、少し都合があつて——半分は
当人の希望です」

「どこへ行くゆんです」

「日向ひゆうがの延岡のべおかで——土地が土地だから一級俸上あがつて行く事になりました」

「誰だれか代りが来るんですか」

「代りも大抵たいてい極まってるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追っては君にもっと働いて頂いただかなくってはならんようになるかも知れないから、どうか

今からそのつもりで覚悟かくごをしてやってもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減って、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いくいが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持ってもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やっこさん

なかなか辞職する気遣いきづかいはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職めんしょくは学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰つて来た。発句ほっくは芭蕉ばしやうか

髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶つるべをとられてたまるものか。

帰ってうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つてかよる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云うところによると船

から上がった、一日馬車へ乗って、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車いちんちへ乗らなくつては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿ざると人が半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。

ところへあいかわらず婆ばあさんが夕食ゆうめしを運んで出る。今日もまた芋いもですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐とうふぞなもと云つた。どつちにしたつて似たものだ。「お婆おばあさん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じやな、もし」

「お気の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじやありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。

それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほら右衛門えもんだ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古

賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんですすい」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くくなりてから、あたし達が思うほど暮くらし向むきが豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして

おくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみところとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰さたがあるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続

きにしたから行くがええと云われたげな。——」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行って月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思った。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手を

しに行く唐変木とうへんぼくはまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。

よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちですね。それでおれの月

給たまを上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げて

やるったって、誰が上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるって云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断ことわりるのぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿

ですぜ。卑怯ひきようでさあ」

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじゃが、年をとつてから考えると、も少しの我慢がまんじゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損をしたと悔くやむのが当り前じゃけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやるとお言いたら、難有ありがとうと受けておおきなさいや」

「年寄としよりの癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももつたいたいと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと

云うのに延岡下りくんだりまで落ちさせるとは一体どう云う
了見りようけんだろう。太宰権帥ださいごんのそつでさえ博多近辺はかたで落ちついたも
のだ。河合又五郎かあいまたごろうだつて相良さがらでとまってるじゃないか。
とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ
気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ
立つて頼むと云うと、また例の弟が取次めつきに出て来た。
おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があ
れば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩たた
き起おこさないとは限らない。教頭の所へきげんうかがご機嫌伺きげんうかがいにく

るようなおれと見損みそくなつてるか。これでも月給が入らな
いから返しにきた来んだ。すると弟が今来客中だと云うか
ら、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つ
たら奥おくへ引き込んだ。足元を見ると、畳たたみ付きの薄っぺ
らな、のめりの駒下駄こまげたがある。奥でもう万歳ばんざいですよと
云う声が聞きこえる。お客とは野だだなど気がついた。野
だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人
じみた下駄を穿はくものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関ま
で出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川

君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲いっぱいんでると見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが変つたから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺ながめたが、とつさの場合返事をしかねて茫然ぼうぜんとしている。増給を断ふしんわる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審ふしんに思ったのか、断ふしんわるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそう

なものだど、呆あきれ返ったのか、または双方そうほう合併がつっぺいしたのか、妙な口をして突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するといふ話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんかから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしょうか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわって、ねちねち押しお

寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそっかしく
て駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそっか
しいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出
して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さ
んにも逢つて詳しい事情は聞いてみなかつたのだ。だ
からこう文学士流に斬り付けられると、ちよつと受け
留めにくい。

正面からは受け留めにくいだが、おれはもう赤シャツ
に対して不信任を心うちの中で申し渡してしまつた。下宿
の婆さんもけちん坊ぼうの欲張り屋に相違ないが、嘘は吐つ

かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙りますめんこうむます」

「それはますます可笑おかしい。今君がわざわざお出いでになつたのは増俸を受けるには忍しのびない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりま

すよ」

「そんなに否いやなら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹ひょう変へんしちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわっても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲ゆずって、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事

を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削けずつて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余じょうよを君に廻まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される。新任者は最初からの約束やくそくで安くくる。それで君が上がりければ、これほど都合つごうのいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、
相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、
それじゃ、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがる
のだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最
初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中で親
切な女みたような男だと思ひ返した事はあるが、それ
が親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃ
よつぽど厭いやになつてゐる。だから先がどれほどうまく
論理的に弁論を逞たくましくしようとも、堂々たる教頭流にお
れを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論の

いい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゆんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同

じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とつぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい奴やつで、

よく偽筆ぎひつへ贗落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいない。君に懸物かけものや骨董こつどうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けもうがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化ごまかしたのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大變失敬した勘弁かんべんしたまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘りんをとつて、おれの蝦蟇口がまぐちのなかへ入れた。山嵐は君それを引き込こめるのかと不審ふしんそうに聞くから、う

んおれは君に奢おごられるのが、いやだったから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やっぱり奢おごつてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙みょうだからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだったと云つたら、君はよつぽど負け惜おしみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張こゝろりだと答えてやった。それから二人の間に

こんな問答が起った。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどっ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津あいづだ」

「会津っ婆か、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜はままで見送りに行こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴さかなを食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿ばかだ」

「君はすぐ喧嘩けんかを吹き懸かける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳けいちような風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話はなしがあるから」

山嵐やぐそくは約束通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間

から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらな
かったが、いよいよ送別の今日となったら、何だか憐あわ
れっぽくって、出来る事なら、おれが代りに行ってや
りたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大
いに演説でもしてその行を盛さかんにしてやりたいと思うの
だが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物とうていにならない
から、大きな声を出す山嵐を雇やとって、一番赤シャツの
荒肝あらぎもを挫ひしいでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐
を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出した

が、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知って
いる。おれが野芹川のせりがわの土手の話をして、あれは
馬鹿野郎ぼかやろうだと云つたら、山嵐は君はだれを捕つらまえても
馬鹿呼よほわりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つ
たじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃ
ない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。そ
れじゃ赤シャツは腑ふ抜ぬけの呆助ほうすけだと云つたら、そうか
もしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は
強いが、こんな言葉になると、おれより遥はるかに字を知つ
ていない。会津っぼなんてものはみんな、こんな、も

のなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職する考えだなと云った。免職するつもりだって、君は免職になる気かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張った。どうしていっしょに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わったと話した

ら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭いやがつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既すでにきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃にげればよいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席そくせきに許諾きよだくしたも

のだから、あとからお母つかさんが泣きついてても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がった。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人おとなしい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道にげみちを拵こしらえて待つてるんだから、よつぽど奸物かんめつだ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かないと、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕

は強そうだな柔術じゆうじゆうつでもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫つかんでみると云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻かいてん転する。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじんよ縋りを二本より合せて、この力瘤

の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云ったら、出来るものか、出来るならやってみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲なぐつてやらないかと面白半分なまじぶんに勧めてみたら、山嵐はそうだなと考かんがえていたが、今夜はまあよそうと云った。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲なぐるくらいなら、あいつらの悪る

い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こつちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゅういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病気だな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭かしんていといつて、当地ここで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳めしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概揃たいがいそろつて、五十畳じゅうじょうの広間に二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳じゅうじょうだに床とこは素敵すてきに大きい。おれが山城屋せんりやうで占領せんりやうした十五

畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中に松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、銭が懸らなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里いまりですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは

江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物せとものというのかと思つていた。床の真中に大きな懸物けんぶつがあつて、おれの顔くらいな大ききな字が二十八字かいてある。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々れいぜいと懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つている。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて靠よりかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋

の懸物の前に狸たぬきが羽織はおり、袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取じんどった。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえている。おれは洋服だから、かしまるのが窮屈きゆうくつだったから、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操教師は黒ずぼんで、ちやんとかしまっている。体操の教師だけにいやに修行が積んでいる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事が立って、一言開会いちごんかいの辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物

な事を吹聴ふいちちようして、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になったのだから致いたし方かたがないという意味を述べた。こんな嘘うそをついて送別会を開いて、それでちつとも恥はずかしいとも思っていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるとまで云った。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくって、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立

てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだ
まされるに極きまつてる。マドンナも大方この手で引掛ひっかけ
たんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最
中、向側むかいがわに坐っていた山嵐がおれの顔を見てちよつと
稲光いなびかりをさした。おれは返電として、人指し指でべっか
んこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつ
と立ち上がったから、おれは嬉うれしかったので、思わず
手をぱちぱちと拍うった。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云う

かと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君がいちじつ一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠へきえんの地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴じゆんぼくな所で、職員生徒ことごとく上代樸直じやうだいぼくちよくの気風を帯びておとしいいるそうである。心にもないお世辞ふまを振り蒔まいたり、美しい顔をして君子を陥おとれたりするハイカラ野郎とつこうは一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚とつこうの士は必ずその地方一般の歓迎かんげいを受けられるに相違そういない。

吾輩わがはいは大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡ふにんに赴任ふにんされたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子こうきゆうの好逑こうきゆうとなるべき資格あるものを択えらんで一日いちじつも早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんばを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せきばら払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐やまあらしが坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席じせきから、座敷の端はしの末座

まで行つて、いんぎん慇懃に一同に挨拶あいさつをした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大せいだいなる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴ちやうだいして、大いに難有ありがたく服膺ふくようする訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく張つて席もとに戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされて

いる校長や、教頭にうやうや恭しくお礼を云っている。それも義理一遍いっぺんの挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心しんから感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目にきんちよう謹聴しているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、どす黒くて竹輪てきそこの出来損ないである。刺身さしみも並んでるが、

厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣となり近所の連中はむしやむしや旨うまそうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだらう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたら、四方が急に賑にぎやかになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゆんめぐるつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましよと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈きうくつにズボンのままかしまつて、一盃はい差し上げ

た。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましよ
うと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決し
てそれには及びおよませんと答えた。うらなり君が何と
云つたつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来
る。まあ一杯ぱい、おや僕が飲めと云うのに……などと
呂律ろれつの巡りまわかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈たいくつ
したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして
眺ながめていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうま

かつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議こうぎを申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡おに居らないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りねこつかぶの、香具師やの、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん

鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知ってる。それで演舌えんぜつが出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩けんかのときに使おうと思つて、用心のためを取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン

師の、イカサマ師の……」と云いかけてみると、椽側えんがわをどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳かけ出して来た。

「両君そりゃひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃にがさない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔よってるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。酔つ

払いは目の中あたる所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだらう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際かべぎわへ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を奇麗きれに食い尽つくして、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣くわえていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いなむこがら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸おいけ

て帰ったんだらう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になって、一同が関ときの声を揚あげて歓迎かんげいしたのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんことを攫つかむ。その声の大きな事、まるで居合抜いあいぬきの稽古けいこのようだ。こつちでは拳けんを打ってる。

よつ、はつ、と夢中むちゆうで両手を振るところは、ダーク一

座あやつりにんぎようの操人形あやつりにんぎようよりよつほど上手じようずだ。向うの隅すみではおい

お酌しやくだ、と徳利を振ってみて、酒だ酒だと言ひ直して
いる。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。

そのうちで手持無沙汰てもちぶさたに下を向いて考え込んでるのは

うらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜おしんでくれるんじゃない。みんなが酒を呑のんで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめいどうまごえ胴間声を出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんだ、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云ったら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちき

りん。叩いて廻って逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩いて廻って逢いたい人がある、と一息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐお歸りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘸はなし家みたよくな言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野とんじやくだは頓着なく、たまたま逢いは逢いながら

……と、いやな声を出して義太夫ぎだゆうの真似まねをやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝ひざを叩いたら野だは恐悦きょうえつして笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊きいの国を踊おどるから、一つ弾ひいて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踊る気きでいる。

向うの方で漢学のお爺じいさんが齒はのない口くちを歪ゆがめて、そりや聞えません伝兵衛でんべいさん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済すましたが、それから？ と芸者に聞いている。爺おやさんなんて物覚えもの覚えのわるいものだ。

一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、でけました
ぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——
花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾
くはヴァイオリン、半可はんかの英語でべらべらと、I am
glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英
語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼ん
で、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下
した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られ
て返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持っ

て来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊の国を済まして、かつぽれを済まして、棚の達磨さんを済まして丸裸の越中禪一つになって、棕櫚箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで気違いだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱がず控えているうらなり君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だって、越中禪の裸踊まで羽織袴で我慢してみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、

古賀さんもう帰りましょうと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰っては失礼です、どうぞご遠慮えんりよなくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。気狂きちがいかい会です。さあ行きましよう、進まないのを無理に勧め、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞ふさいだ。おれはさつきから肝癩かんしやくが起っているとところだから、日清談判なら

貴様はちゃんちゃんだろうと、いきなり拳骨げんこつで、野だの頭をぽかりと喰くわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになったのは情ない。この吉川をちようちやく打擲とは恐れ入った。いよいよもって日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐そうどうが何か騒動が始まったと見てとって、剣舞をやめて、飛んできたが、このでいたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攫つかんで引き戻もどした。日清………いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横ねじに振った

ら、すたとんと倒れた。あとはどうなったか知らない。
途中とちゆうでうらなり君に別れて、うちへ帰ったら十一時過
ぎだった。

十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんべいばで式があるという
ので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。
おれも職員ひひとりの一人としていっしょにくっついて行くん
だ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいであ

る。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛しかけである。仕掛しかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒の体面にかかわると思つてる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関ときの声を揚あげたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなも

のだ。軍歌も関の声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いつたつて聞きつこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師のわる口を喋舌しゃべるんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪おおちがさして、まあこれならよろうと思つていた。ところが実際は大違おおちがいである。下宿の婆ばあさんの言葉を借りて云えば、正に大違おおちがいの勘五郎かんごろうである。生徒があやまったのは心しんから後悔こうかいしてあやまったのではない。ただ校長から、命令されて、

形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、
狡ずるい事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはする
が、いたずらは決してやめるものでない。よく考えて
みると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立
しているかも知れない。人があやまつたり詫わびたりす
るのを、真ま面目じめに受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿ばか
と云うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、
勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差さし支つか
えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔
するまで叩たたきつけなくてはいけない。

おれが組と組の間には行って行くと、天麩羅だの、
団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、
誰だれが云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天
麩羅と云つたんじゃないやありません、団子と申したのじゃ
ありません、それは先生が神経衰弱しんけいすいじやくだから、ひがんで、
そう聞くんだぐらい云うに極きまつてる。こんな卑劣ひれつな
根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだ
から、いくら云つて聞かしたつて、教えてやったつて、
到底とうてい直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白
なおれも、この真似まねをしなければならなく、なるかも

知れない。向うむこでうまく言い抜ぬけられるような手段で、おれの顔を汚よごすのを抛ほうつておく、樗蒲ちよぼいち一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰けいぼつとして何か返報をしてやらなくつては義理ぎりがわるい。ところがこつちから返報さかねじをする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向うから逆振さかねじを食くわして来る。貴様きさまがわるいからだと云うと、初手はつてから逃げ路みちが作つくつてある事だから滔々と弁べんじ立てる。弁べんじ立てておいて、自分自分の方かたを表向ひらきだけ立派りつぱにしてそれからこつちの非とがを攻撃こうげきする。もともと返報さかねじに

した事だから、こちらの弁護は向うの非が挙がらない
上は弁護にならない。つまりは向うから手を出してお
いて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みな
されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやる
なり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極め込んでいけば、向うはます
ます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにな
らない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法
を用いて捕まつかえられないで、手の付けようのない返報
をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸えどっ子も
駄目だめだ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも

人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰って清きよといっしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮落だらくしに来ていようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりはました。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぼうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はびたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、おおもてまち大手町を突つき当あって薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまったぎり、押おし返したり、押し返されたりして揉もみ

合っている。前方から静かに静かにと声を涸らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範しはん学校が衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭せまい田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳かけ出して行った。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなってる。後ろか

らは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔じやまになる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭いすずど号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅肅しゆくしゆくとして行進を始めた。先を争つた衝突は、折合ゆずがついたには相違そういないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳ばんざいを唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だ

から、ひとまず下宿へ帰って、こないだじゅうから、
気に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつ
と詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに
認したためなくつちやならない。しかしいざとなつて、半切はんぎれ
を取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書
き出しているか、わからない。あれにしようか、あれ
は面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。何
か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清
が面白いがるようなものはないかしらん、と考えてみる
と、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれ

は墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙を睨にらめて、——巻紙を睨にらめて、筆をしめして、墨を磨すつて——同じ所作を同じように何返も繰くり返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦あきらめて硯すずりの蓋ふたをしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けて行って、逢あつて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食だんじきよりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛ほうり出して、ごろりと転がってひじまくら肱枕ひじまくらをして庭にわの方を眺ながめてみたが、やっぱり清の事が

気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まことは清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮くらしてると思ってるだろう。たよりは死んだ時か病気の時か、何か事の起った時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪とつぼほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑みかんがあつて、塀へいのそとから、目標めじるしになるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生なつていと

ころはすこぶる珍めづしいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗きれいだろう。今でももう半分色の変ったのがある。婆ばあさんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨うまい蜜柑だそうだ。今に熟うれたら、たんと召めし上がれと云ったから、毎日少しずつ食ってやろう。もう三週間もしたら、充分じゅうぶん食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然ぐうぜん山嵐やまあらしが話しにやって来た。今日は祝勝会だから、君といっしょ

にご馳走ちそうを食おうと思つて牛肉を買つて来たど、竹の皮つづみの包たもとを袂から引きずり出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿いもぜめで芋責いもぜめ豆腐責いもぜめになつてる上、蕎麦屋そば行き、団子屋だんご行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆なべさんから鍋なべと砂糖なべをかり込んで、煮方にかたに取りかかった。

山嵐むやみは無暗むやみに牛肉ほおばを頬張ほおばりながら、君あなじみの赤シャツなじみが芸者なじみに馴染なじみのある事を知つてるかと聞くから、知つてるとも、この間うらなりの送別会ほくの時に来た一人ごろがそうだろうと云つたら、そうだ僕ほくはこの頃ごろようやく勘

づいたのに、君はなかなか敏捷びんしやうだと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性しんせいだの、精神的娛樂ごんらくだのと云う癖くせに、裏へ廻まわつて、芸者と關係くわいなんかつけとる、怪けしからん奴やつだ。それもほかの人が遊ぶのを寛容かんようするならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締とりしまりじよう上害になると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娛樂で、天麩羅や、団子は物理的娛樂なんだろう。精神的娛樂なら、もっと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴

染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化ごまかす気だから気に食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないとか、露西亞ロシア文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟けむに捲まくつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中ごてんじよちゆうの生れ変わりか何かだぜ。これによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげま、また何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そこのとこ

ろはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫さなだむしが湧わくぜ」

「そうか、大抵たいてい大丈夫だいじょうぶだろう。それで赤シャツは人に隠かくれて、温泉ゆの町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそう
だ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますため
には、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むと
ころを見届けておいて面詰めんきつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に柵屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」
「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておく、日本のためにならないから、

僕が天に代って誅戮ちゆうりくを加えるんだ」

愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ柝屋かけあに懸合かけあってないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕ぼくは計略はかりごとは下手へただが、喧嘩とくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治はかりごとの計略を相談し

ていると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生ほったにお目にかかりたいてお出いでたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃが、お留守るすじゃけれ、大方ここじやろうてて捜さがし当ててお出でたのじゃがなもしと、鬨しきの所へ膝ひざを突ついて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関げんかんまで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘さそいに来たんだ。今日は高知こうちから、何とか踊おどりをしに、わざわざここまで多人数たにんず乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊おどりだという

んだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに
乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京で
たくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町
内へ廻つてくるんだから汐酌しおくみでも何でもちやんと心
得ている。土佐つぼの馬鹿踊なんか、見たくもないと
思ったけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、
つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘みいに来たもの
は誰かと思つたら赤シヤツの弟だ。妙みやうな奴やつが来たもん
だ。

会場へはいると、回えこういん向院すもうの相撲ほんもんじか本門寺おえしきの御会式の

ように幾旒いくながれとなく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄なわから縄、綱つなから綱へ渡わたしかけて、大きな空が、いつになく賑にぎやかに見える。東の隅すみに一夜作りの舞台ぶたいを設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀よしずの囲いをして、活花いけぼなが陳列ちんれつしてある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉うれしがるなら、背虫の色男や、跛びつこの亭主ていしゆを持って自慢じまんするがよかろう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳ていこくばんざいとかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜いぬくように揚がるあると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘かさの骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉ゆの町から、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方観音様の境内けいだいへでも落ちたろう。

式の時はずほどもなかつたが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんな人間が住んでるかとおどろいたぐらいうじやうじやしている。利口な顔はあまり見当たらないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであつた。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴たつつけばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列

と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいいだろ、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。たった一人列を離はなれて舞台の端はしに立ってるのがあるばかりだ。この仲間外はずれの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は太神楽だいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出して、妙な謡うたをうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩たたく。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの合併がっぺいしたものと思えば大した間違まちがいにはならない。

歌はすこぶる悠長ゆうちやうなもので、夏分の水飴みずあめのように、だらしがないが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようにでも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速じんそくなお手際で、拝見していても冷々する。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、同志撃どうしうちを始めて怪我けがをする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険あぶなくもないが、

三十人が一度に足踏あしぶみをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅おそ過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲はんいは一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌しおくみや関せきの戸との及およぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそ

うだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰こしの曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍はたで見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたってるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物している、半町ばかり、向うの方で急にわっと云う関おだの声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中

が、にわかには波を打って、右左りに揺うごき始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声があると、人の袖そでを潜くぐり抜ぬけて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝けさの意趣返いしゆがえしをするんで、また師範しはんの奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜もぐり込こんでどつかへ行いってしまつた。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避よけながら一散かに馳かけ出した。見ている訳にも行かないから取り鎮しずめるつ

もりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵かかとを踏んであとからすぐ現場へ駆けつけた。喧嘩は今まつさいちゆうが真最中である。師範の方は五六十人もあるうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵たいていは日本服に着換きえているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解ほこれつ戦つてるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困ったなと云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡査じゆんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、お

れの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しはげそうな所へ躍りおど込んだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突つき貫ぬけようとしたが、なかなかそう旨うまくは行かない。一二間はいつたら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較ひかくてき的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩かたを持って、無理に引き分けようとする途端とたんにだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。

おれは不意を打たれて握にぎった、肩を放して、横に倒たおれた。堅かたい靴くつでおれの背中の上へ乗った奴がある。両手と膝を突いて下から、跳はね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がったを見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟はさまりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云ってみたが聞えないのか返事もしない。

ひゆうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬ほお骨ほねへ中あたったなと思ったら、後ろからも、背中を棒ぼう

でどやした奴がある。教師の癖くせに出ている、打ぶて打ぶてと云う声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍そばに居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行った。山嵐はどうなったか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいつたんだが、どやさされたり、石をなげられたりして、恐おそれ入いつて引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だ

と思うんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしている、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声がした。今まで葛練りくずねの中で泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却たいきやくは巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付もんつきの一重羽織ひとえばおりをずたずたにして、向うの方で鼻を拭ふいている。鼻柱をなく

られて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がった
真赤まっかになつてすこぶる見苦しい。おれは飛白かすりの袷あわせを着
ていたから泥どろだらけになつたけれども、山嵐の羽織ほ
どな損害はない。しかし頬ほっぺたがぴりぴりしてたまら
ない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から
退却したので、捕つかまったのは、おれと山嵐だけである。
おれらは姓名せいめいを告げて、一部始終を話したら、ともか
くも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の
前で事の顛末てんまつを述べて下宿へ歸つた。

十一

あくる日眼めが覚めてみると、身体からだ中痛くてたまらな
い。久しく喧嘩けんかをしつげなかつたから、こんなに答え
るんだらう。これじゃあんまり自慢じまんもできないと床とこの
中で考えていると、婆ばあさんが四国新聞を持つてきて
枕元まくらもとへ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀たいぎなんだ
が、男がこれしきの事に閉口へこたれて仕様があるものか
と無理に腹はら這ばいになつて、寝ねながら、二頁を開けてみ

ると驚ろいた。昨日の喧嘩がちやんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然

として起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢ぶらいかんの上に加えて、彼等かれらをして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸きゅうを据すえたつもりでいる。おれは床の中で、糞くそでも喰くらえと云いいながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節ふしぶしが非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛なげつけたが、それでもま

だ気に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行って棄すてて来た。新聞なんて無暗むやみな嘘うそを吐つくもんだ。世の中なかに何が一番いちばん法螺ほらを吹ふくと云つて、新聞ほどの法螺吹ふきはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向むこうで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任しゆにんした生意気な某たがとは何だ。天下に某と云う名前せいめいの人があるか。考えてみる。これでもれっきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図けいずが見たけりや、多田満仲ただのまんじゆう以来の先祖せんぞを一人ひとり残のこらず拝ひらましてやらあ。——顔を洗あらったら、頬ほべたが急に痛いたくなつた。婆ばあさんに鏡かがみをかせと云つたら、

けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちゃ一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらつ

た顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐった返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやった。するとこりや恐おそれい入りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと言うから、痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒ど鳴りつけてやったら、向むこう側の自席へ着いて、やっぱりおれの顔を見て、隣となりの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至っては、
紫色むらさきいろに膨張ぼうちようして、掘ほつたら中から膿うみが出そうに見える。
自惚うぬぼれのせいか、おれの顔よりよつぽど手ひどく遣や
られている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近
しい仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面に
あるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊かたまっている。
ほかの奴は退屈たいくつにさえなるときつとこつちばかり見
る。飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿ばか
がと思つてるに相違そういない。それでなければああいふ風
に私語ささやきあ合つてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると

生徒は拍手をもつて迎えた。先生万歳と云うものが二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分からない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点しょうてんとなつてゐるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍そばへ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込むこ手続きにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘さそいに行つたから、こんな事が起おこつたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽力じんりよくするつもりだから、どう

かあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を新聞がかき出しましたね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見えた。おれには心配なんか無い、先で免職めんしょくをするなら、免職される前に辞表を出してしまっただけだ。しかし自分がわるくないのにこっちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思ったが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云う

から、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭みはからに時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨うらみを抱いだいて、あんな記事をこ
とさらに掲かかげたんだらうと論断した。赤シャツはおれ等の行為こういを弁解しながら控所ひかえじよを一人ごとに廻まわつてある
いていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自
分の過失であるかのごとく吹聴ふいちようしていた。みんなは全
く新聞屋がわるい、怪けしからん、両君は実に災難だと
云つた。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いくさいぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじゃないやなろうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲まき込こんだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴そぼうなようだが、おれより智慧ちえのある男だと感心した。

「ああやって喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物かんぶつだ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰つあした

「ちまわあ。こんな下等な所に頼たのんだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証しょうこ拠の拳こぶしがらないように、拳こぶしがらないようにと工夫するんだから、反はん駁ぼくするのにはむずかしいね」

「厄やっかい介かいだな。それじゃ濡ぬれぎぬ衣ぬいを着るんだね。面おも白しろくもない。天道てんどう是ぜ耶か非ひかだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それで

いよいよよとなつたら、温泉の町で取つて抑えるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」
「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れた。赤シャツが果たして山嵐の推察通りをやつたのなら、実にひどい奴だ。到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくつちや駄目だ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個

人でも、とどの詰りは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披いてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つて狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出すでしようと言つて。

明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張っているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹

が立つたから、それじゃ私が一人で行って主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説論せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鼈すっぽんに食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕つつた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然ふんぜんとやって来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座そくざに一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾かたむけた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋たずねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決しよけつしてくれと云われたとの事だ。「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓はらつづみを叩たたき過ぎて、

胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いつしよに、祝勝会へ出てさ、いつしよに高知のぴかぴか踊りおどを見てさ、いつしよに喧嘩をとめにはいったんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。い。なんでじれった焦慮じれったいな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸ゆきがかり上到底とうてい両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならな

いと思うなんて生意気だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたって、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だって古賀が去ってから、まだ後任が事故のために到着とうちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席伺うかがわせる気なんだな。こん畜生ちくしょう、だれがその手に乗るものか」

翌日あくるひおれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合つごうで……」

「その都合が間違まちがってまさあ。私が出さなくって済むなら堀田だって、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られ

てもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払ってる。おれは仕様がなから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まっていられると思っていらっしゃるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去ったら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情

も察してくれなくつちや困る。それに、来てから一月

立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の

履歴りれきに關係するから、その辺も少しは考えたらいいで

しよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切で
す」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつ
ともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君

が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやってみてほしい。とにかく、うちでもう一返考え直してみてください」

考え直すつて、直しようのない明々白々たる理由だが、狸が蒼あおくなったり、赤くなったりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣かたつつける方から塊かためて、うんと遣つつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのまま

にしておいても差支さしつかえあるまいとの話だったから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧りこうらしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶あいさつをして浜はまの港屋まで下さがったが、人に知れないように引き返して、温泉ゆの町の枡屋ますやの表二階へ潜ひそんで、障子しょうじへ穴をあけて覗のぞき出した。これを知ってるものはおればかりだろう。赤シャツが忍しのんで来ればどうせ夜だ。しかも宵よいの口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極きまってる。最初の二晩はおれも十一時

頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿気た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違う。こつちのは天に代つて誅戮を加える夜遊びだ。とはいうものの一週間も通つて、少しも験が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をやるが、その代り何によらず長持

ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽あきる事に變りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固がんこなものだ。宵よいから十二時過すぎまでは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈がすとうの下を睨にらめつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊とまりが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじゃないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯しょうがい天誅

を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懐手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんを登つて山嵐ざしきの障子をあげると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活気を呈ていした。昨夜ゆうべまでは少し塞ふさぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰気臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も

聞かない先から、愉快愉快と云った。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいった」
「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」
「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡ずるい奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニツケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈らんぶを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いっかんばりの机の上にあつた置き洋燈らんぶをふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子かおへ面をつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだ

ぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合のいいように毎晩勘定かんじようするんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈ききゆうくつでたまらな
い」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々てんもうかいかいそ疎そにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小聲こせになつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違ちがっている。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打つた。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は半分静かになつた。遊廊ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きこえる。月が温泉ゆの山の後うしろからのつと顔を

出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突つき留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦ずる音がする。眼を斜ななめにするとやつと二人の影法師かげぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追っ払ったから」正まさしく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がなない」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだ

の坊っちゃんだから愛嬌あいぎょうがありますよ」「増給ぞくぎふがいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちぶのめしてやろうと思つたが、やつとの事で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜ぬかしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃ようげきしなければならな

い。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼たのんで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵たいていなら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじつとして待つてゐるのはなかつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙すきから覗のぞめているのもつらいし、どうも、こゝろも心が落ちつかなくつて、これほど難儀なんぎな思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑おさえようと発議ほつぎしたが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥しりぞけた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中とちゆうで遮おさられる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃にげるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込める

と仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事ですとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾^つけた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉^ゆの町をはずれると一丁ばかりの杉並木^{すぎなみき}があつて左右は田圃^{たんぼ}になる。それを通りこすところかここに藁^{わら}葺^{ぶき}があつて、畠^{はたけ}の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれ

れば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云って肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻って行手を塞いでしまった。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊つた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪むという規則がありますか」

と赤シャツは依然いぜんとして鄭寧ていねいな言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。

「取締上不都合とりしまりじょうだから、蕎麦屋そばやや団子屋だんごやへさえはいつてはいかんと、云うくらいきんちよく謹直な人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云ったんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂たもとを握にぎつてる。追つ

かける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やっとなんかしながら、野だの面へ擲たきつけた。玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつぽど仰天ぎょうてんした者と見えて、わっと言いなから、尻持しりもちをついて、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癩かんしゃくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て

始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生ちくしょう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たきつけたら、野だは顔中黄色になった。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊ったと云う証拠しょうこがありませんか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいったのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったの

である。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知った事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨げんこつを食わした。赤シャツはよろしたが「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたぼかりと撲なぐる。「貴様のよ様な奸物はなぐらなくつちや、答えないんだ」とぼかぼかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいには二人とも杉の根方にうづくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてやる」とぼかんぼかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲こりて以来つつしむがいい。いくら言葉巧たくみに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共ふたりともだまっていた。ことによると口をきくのが退儀たいぎなのかも知れない。

「おれは逃げも隠かくれもせん。今夜五時までは浜の港屋

に居る。用があるならじゆんさ巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へうった訴えたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階

で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之わたくしぎの辞職の上東京へ帰り申候もうしそくにつき左様御承知被下度候さようごししょうちくだされたくぞろ以上とかいて校長宛あてにして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつぱんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄ふじょうな地を離はなれた。船が岸

を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たよ
うな気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う
機会がない。

清きよの事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着
いて下宿へも行かず、革鞆かぼんを提げたまま、清や帰った
よと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く
帰って来て下さったと涙なみだをぼたぼたと落した。おれも
あまり嬉うれしかったから、もう田舎いなかへは行かない、東京
で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋しゅうせんで街鉄がいてつの技手ぎてになつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関げんかん付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎はいえんに罹かかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

(明治二十九年四月)

底本・・「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本・・「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5―86）を、大振りにつくっています。

入力..真先芳秋

校正..柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。